

外国人児童を対象とする母語を活用した 教科学習支援の縦断的研究

石上 綾子

1. 研究の目的

近年、日本全国で日本語指導を必要とする外国人児童・生徒の数は増加している。そして、彼らに対する日本語教育は急務となっている。また、これまでに彼らの教科学習上の困難に対して注目されるようになってきており、同時に母語教育について必要性が指摘されてきている。しかし、教育現場では彼らの母語教育と日本語教育に関する研究の実践の蓄積があまりない。そこで、本研究では実際に母語を使って外国人児童に教科指導することを通して、以下の目的で観察及び分析を行う。

(1) 日本語での教科学習場面で対象児の母語を使用して学習支援をすることにより、日本語能力、母語能力、教科学習能力がどのように推移するかを観察する。

(2) 実際にどのような母語の活用が効果的か、第二言語による教科学習における母語の役割について探る。

(3) 母語を活用した学習支援として入り込み指導を行い、支援の役割や効果について明らかにする。

2. 先行研究

日本における外国人年少者の日本語指導の問題として、日常使用する日本語は理解できるが学年相当の教科学習の授業についていけないということが挙げられる。このような外国人年少者の問題について Cummins(1996)は教科学習が理解できる言語能力を習得するには、5~10年かかるとしている。また、「共通深層能力モデル」で「第一言語で教育を受けると学習内容が理解しやすく、第一言語と第二言語を併行して学習すると、その間学習上の遅れが発生しない」としている。このことから、年少者が身につけている母語の力を助けに、日本語の学習内容を理解するという母語を生かし

た指導の必要性が挙げられてきている。

岡崎(1997)は「教科・母語・日本語相互育成学習」を提唱し、「教科書の単元内容の理解を、日本語能力が十分になるのを待ってではなく、母語の助けを借りて学習言語の理解を図りながら、在籍学級での単元の進行に合わせて進めていくことができる。母語の助けを借りることによって、日本語能力が十分ではない外国人年少者が授業に参加し、教科学習の理解ができ母語の保持育成をし、日本語も理解可能になるのである。」としている。

3. 研究における母語支援の方法

一児童の縦断的研究を参与観察を通して行う。指導研究、調査データの収集は2004年12月から2005年12月までの1年である。

3.1 調査対象児 (以下Jとする)

学年 : 6年 性別 : 女兒 年齢 : 12歳
出身地 : コロンビア国

来日 : 2003年10月(当時9歳2ヶ月)

茨城県S市の小学校に編入した当初は、ほとんど日本語が理解できなかった。家庭では両親と妹、弟とはスペイン語で話し、学校では通訳をしてくれるペルー人女兒に頼り、編入後9ヶ月がたっても日本語がほとんど話せなかった。毎日、1~2時間(国語と算数の時間)日本語の取り出し指導が行われ、平仮名と片仮名は書けるようになっていた。取り出し指導の時間以外は在籍学級の授業に参加していたが、日本語がわからないので全く理解できなかった。この頃から母語による支援が始まった。

3.2 取り出し指導

(1) 算数の先行学習

対象児の在籍学級の算数の先行学習(学級で学習する単元を予め母語の助けを借りて理解させる)の指導をする時に子どもの母語を使い、どのような母

語の活用が効果的かを観察する。

(2) 絵物語の学習

母語で書かれた絵物語の読みを通して、母語の学習言語の使用を再開し、母語能力を保持・育成することを目指す。また、母語訳の力を借りて日本語の内容が理解できるようになり、日本語による読む力の基礎を育てることをねらいとしている。そして、母語の効果について探っていく。

(3) 対象児の行ったテスト

母語の読みのテストを行い、これらのテストから教科学習の内容理解、日本語の能力、母語の能力の分析をし、それぞれの能力がどのように推移するかをそれぞれの能力がどのように推移するかを観察する。

3.3 入り込み指導

先行学習を行った後で在籍学級の授業に参加をする。この時、筆者が対象児と一緒に授業に参加して

入り込み指導を行い、対象児のそばで母語による学習の支援を行う。そこで、実際に在籍学級で入り込み指導を行った結果を分析し、母語支援の効果や役割について明らかにする。

4. 分析と考察

4.1 先行学習

以下にJへの学習支援として行った算数の先行学習のまとめを行う。分析データは授業の録音を文字化したものとその記録、テストやプリントである。

<母語の役割>

母語支援を受けながら算数の先行学習を行う中で、Jに変化が見られるようになってきた。先行学習の授業中の支援者とJのやり取りを通して、母語がどのような役割を果たしているのか明らかにする。

①理解を助ける(説明、発問による)

例1：小6算数『分数』(支援開始6ヶ月)

支援者の働きかけ	Jの反応
II: (分子の子) <u>し</u> <u>significa</u> <u>niño</u> . 【子どもの意味】 (分母の母) <u>ぼ</u> <u>significa</u> <u>mamá</u> おかあさん。 【お母さんの意味があります】	「子」「母」の意味をわかりやすくするため漢字の意味を母語や絵を描きながら説明する。
2J: あー、わかった...	理解でき、喜ぶ
3I: これは? (分子、分母を指す)	確認の説明をする。
4J: <u>ぶんし</u> 、 <u>ぶんぼ</u> 、(正しく言えた)	正しく答えられる
5I: <u>分数 tiene tres forma</u> . 【3つの形があります】 これは (1/2、1/3を指す) 真分数。読んで。	分数に3つの形があることを理解させるため母語で言う。

単に、母語に訳すだけではなく、絵も描きながら漢字の意味を説明した。すると、「わかった」という発言があった。そして、確認問題にも正しく答えることができた。また、母語による発問は、算数の先行学習の学年相当の教科学習を理解することを助けている。

②既習事項を思い出す

算数の先行学習で学んだことや、コロンビアの学校で学んだ既習事項を思い出すことで、学習内容が理解しやすくなる。理解できる自信が、在籍学級の授業に参加して学ぶという意欲につながる。

<母語の役割によって促進される学習>

③学習に必要な日本語を学ぶ

算数の学習の中でも学習用語や、算数の学習によ

く出る言葉を日本語で覚えたり、漢字を含めて学ぶことができる。算数の学習をしながら、学習に必要な日本語を取り上げて指導することにより、算数の学習の理解も進み日本語を身につけることで生活の適応も促される。

④わかる楽しさを味わわせる

指導初期の頃は、よくわからない日本語で教科学習することの難しさから、授業の態度は受身的であった。指導中・後期に入ると自発的にわかった喜びを表現するようになってきた。

4.2 入り込み指導

入り込み指導を行った例からどのような支援の効果があったのか、また、入り込み指導の役割についてまとめる。

<母語の役割>

①算数の教師の質問の焦点を母語で言う

算数の教師がした質問の大事な点が伝わるように母語で問いかけたり、説明を母語に訳して伝える。質問の内容を理解していれば、児童が自分で考えた

り予想することが可能になる。また、解決のヒントを与えられる。そして、子どもの授業参加を促すことができる。

②既習事項や先行学習との関連を思い出す。

例2：小6算数『分数のかけ算』（支援開始10ヶ月）

_____支援者の働きかけJの反応	支援者の働きかけ	Jの反応
1.問題を書く 問題：ケーキを1個作るのに、さとうを3/8kg使います。このケーキを4個作るには、さとうは何kgいるでしょう。 J1：Eso lo hice... (教科書p4を開く。)【前にやった】 I1：Entonces, puedes ¿no? 【じやできるね】		先行学習との関連を思い出す	

このように、母語支援を通して既習事項や先行学習との関連を思い出し、学習内容を理解することができるようになってきた。このことは、児童に「できる」という自信を持たせることが可能になり、在籍学級での日本語による算数の授業への参加に対する自信がついてきた。

<母語の役割によって促進される学習>

一つ目は算数の学習内容を理解する上で重要な学習用語（日本語）を取り上げることにより、日本語の学習の場にもなるということが挙げられる。

二つ目は学習意欲を持たせることができるということである。授業がわかるようになってくると、授業に臨む姿勢が変わってきた。自力で式や答えを導けたということが大きく影響し、学習に対して自信を持つことができた。また、教師や他の児童に認めてもらえるということが、心強い励ましになったようである。

<算数のテスト結果>

全体を通して考察すると、初めは支援を受けなければできなかったテストが、明らかに母語による支援の結果できるようになってきた。指導中期、後期になるに従って「先行学習一入り込み指導」のパターンと母語支援の定着が図られてきた。特に指導後期はこのパターンの授業を集中的に行うことができた。この授業が行われるようになってから、Jは算数の授業内容を理解できるようになり、テストにおいても支援者の母語訳やヒントを受けながら、かなりよくできるようになってきた。

4.3 絵物語の学習

絵物語を使った指導例からどのような変化が見られ、進展があったかについて以下にまとめる。

<母語の役割>

絵物語を楽しんで読んだり、関連した話題を話すことを通して日本とコロンビア両国の文化、習慣等の違いを生活経験から話すことができる。また、母語能力を活用し、母語を保持することが期待できる。

①日本語の習得

単語を覚えることから文の理解、内容の理解、日本語習得を助けることができた。そして、自然に日本語を身につけることが可能になっている。それは、生活言語を出発点とした学習言語の養成の過程として、日本語の文章を読む基礎を育てることにつながってくる。

②漢字力向上への寄与

後期に入ると日本語による読みも可能になってきた。同じ絵物語を母語訳で読んだ後、日本語訳で読めるようになってきた。始めは平仮名だけで書かれたものをゆっくりと音読した。そこに、少しずつ漢字を増やしていった。漢字は物語の中に繰り返し出てくるもの、日常目にしたり使っている言葉を選んだ。そうすることにより、読める漢字の数が増えてきた。

例3：絵物語の学習 『 ¡ Qué perro más travieso! 』【何ていたずらな犬なんだ】(支援開始5ヶ月)

_____支援者の働きかけ _____Jの反応	支援者の働きかけ Jの反応
1I: miró, a ?	【だれを】
2J: papá y ladró. 【パパを、そして ほえた】	
3I: 日本語で言ってごらん。	日本語で言うように促す。
4J: レックスはパパを見てほえた。	日本語で正しく答える

<絵物語のテスト結果>

平仮名再生テストは単語から文へと難しくなったが、間違いは減ってきた。母語による内容読解は全く問題がなかった。感想を母語で書くことは、文の数が増えてはいるものの表記間違いが見られた。母語は話してはいるが書く機会がないので、それが影響していると思われる。

5. 国際理解活動への参加

Jの在籍する小学校では、1年に一度校内国際集会(S小学校では「こくさい集会」と呼んでいる)を開催して在籍する外国人児童を温かく受け入れたりと、外国人や異文化に対する理解を深めている。今年は、Jが中心となって発表を行った。このこくさい集会を通して次のような顕著な成長がみられた。①日本語の上達 ②外国人児童のリーダーとしての自覚③自国文化を伝える。

6. 研究のまとめ

母語支援を行って算数の学習支援をすることによって、教科学習能力、母語能力、日本語能力が相互に関連し合って伸びていくことが確認できた。また、母語の活用の効果については、子どもの思考を促し理解を助けることができた。子どもにわかる楽しさを味わわせることができた。そして、学習に必要な日本語を学ぶことができたという三点を挙げることができる。

入り込み指導の効果としては、先行学習との関連を思い出し、自ら問題解決したり在籍学級での授業も理解できるようになった。また、在籍学級

の授業に参加することにより算数の教師や友達の励ましを受けられたり、日本語の指導や母語支援もうけられ多面的な指導が可能になったことが挙げられる。入り込み指導の母語の役割としては、前述のような入り込み指導の効果を受け、母語支援が在籍学級での授業参加を可能にするという役割が明らかになった。

参考文献

- 池上摩希子 (1998)「教科に結びつく初期日本語指導の試み—教材『文型算数』を用いた実践例報告—」『日本語教育 97号』p118-129
- 石井美佳 (1999)「多様な言語背景を持つ子どもの母語教育の現状—「神奈川県内の母語教室調査」報告—」『中国帰国者定住促進センター紀要』第7号 p148-187
- 岡崎敏雄 (1995)「年少者言語教育研究の再構成—年少者日本語教育の視点から」『日本語教育』86号 p1-12
- 岡崎敏雄 (1997)「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成八年度外国人児童生徒指導資料母国語による学習のための教材』茨城県庁教育庁指導課 p1-7
- 岡崎敏雄 (1997)「年少者言語教育の再構成—社会・文化面における再構成—」『筑波大学応用言語学研究 vol.3』pp1-10
- 岡崎敏雄 (2002a)「年少者日本語教育における意思決定のパターンの分析」『文藝言語研究』vol.41
- 朱桂栄 (2002)「教科学習における母語の役割—来日間もない中国人児童の「国語」学習の場合—」『日本語教育 119号』
- オックスフォード大学出版局学術・一般書部門「Oxford Reading Tree」オックスフォード大学出版局
- Cummins, J. and Swain, M. (1996) *Bilingualism in Education: Aspects of theory, research and practice*, London: Longman

いしがみ あやこ／筑波大学留学生センター

i_ayakoishi@yahoo.co.jp